

# 「は」と「が」の使い分けを 学習者に伝えるための試み

——「主語」に基づくアプローチ——

庵 功 雄

## 1. はじめに

「は」と「が」の使い分けは、日本語学習者（以下、学習者）にとって最も難しいものと考えられている。「は」と「が」の使い分けについては、以下のような考え方が主流であると思われる。

- (1) a. 「は」と「が」の使い分けは難しい
- b. 「は」と「が」は韓国語話者以外には習得が困難である

(1b) は韓国語には日本語の「は」と「が」にほぼ対応する助詞が存在することに基づいたものであるが、(1a)(1b)については、学習者だけではなく、教師側も同様の認識を持っていると考えてよさそうである。

これに対し、筆者はこれまでの論考において、(1a)(1b) がともに誤解であり、「は」と「が」の使い分けは実際は「どの母語話者にとってもとても簡単」であると論じてきた（庵 2018a, 2018b, Iori 2017）。

筆者は、前稿までのこの結論は正しいと確信しているが<sup>(1)</sup>、前稿までの記述は教師側の認識に立った部分が大きく、学習者に伝えるという点では十分に操作的（operative）であったとは言えない。この点を踏まえ、本稿では、筆者自身の授業実践での試みも参考にしながら、「は」と「が」の使い分けを学習者に伝えるために必要な点について考える。さらに、「は」と「が」に隠されがちであり重視されていない「ハ-ガ構文」についても取り上げる。最後に、「は」と「が」以上に難しく、かつ、重要度も高い「は」自体の性質について、今後の研究で考えるべき課題を指摘する。

## 2. 「は」と「が」の使い分けについて（前稿までの結論）<sup>(2)</sup>

本節では、前稿までの結論をごく簡単に紹介する。より詳しい議論については、注2に挙げた拙稿及びそこで引用している拙論を参照されたい。

### 2.1 主題と主語

「は」と「が」の使い分けを考える上で重要なのは、主題（theme, topic）と主語（subject）の区別であるが、ここでは、次のように規定しておく<sup>(3)</sup>。

- (2) 主題：基本的に文頭であって、その文が何について述べるものかを示す  
主語：動作、出来事、存在、状態、属性などの「主」を表す<sup>(4)</sup>

### 2.2 主語でもある「は」と主語ではない「は」

日本語教育という観点から最も重要なのは、「は」と「が」の位置づけである。すなわち、「は」には「主語でもある「は」と「主語ではない「は」があること、「が」は基本的に「主語」を表す<sup>(5)</sup>ことを教師側が認識し、そのことを学習者に伝えることが重要である。

「主語でもある「は」と「主語ではない「は」はそれぞれ次のようなものである。

- (3) 田中さんはこの本を書いた。  
主題&主語

- (4) この本は田中さんが書いた。  
主題            主語

(3)の「田中さんは」は「は」がついているので「主題」であり、かつ、「書く」という動作の主であるので「主語」でもある。一方、(4)の「この本は」は主題ではあるが主語ではない。「書く」という動作の主である主語は(3)と同じく「田中さんが」である。

### 2.3 従属節の主語

後述のフローチャートでは「従属節の主語」か否かが重要であるが、この場合の従属節の主語は「従属節が独自の主語を持つ」場合のことである。このことは学習者にしっかり理解してもらう必要があるので、以下の語については、明示的に導入

する必要がある。

- (5) 節 (clause) : 述語 (と主語) を含む意味的な1つのまとまり<sup>(6)</sup>
- (6) 従属節 (subordinate clause) : 日本語の場合, 節のうち, 普通の語順で前に来るもの, または, 名詞を修飾するもの<sup>(7)</sup>。(10)~(12) の [ ] 内の部分は全て従属節
- (7) 主節 (main clause) : 日本語の場合, 節のうち, 普通の語順で後ろに来るもの。(10)(11) の波線部はともに主節
- (8) 単文 (simple sentence) : 節が1つだけの文
- (9) 複文 (complex sentence) : 節が2つ (以上) ある文<sup>(8)</sup>
- (10) [私が帰ったとき,] 妻は出かけていた。
- (11) [(私が) 窓を開けたら,] 富士山が見えた。
- (12) [田中さんが買った] カメラはこれです。

↑  
修飾する

したがって, (13) の「雨が」は「従属節 (だけ) の主語」であるが, (14) の「田中さんは」は「従属節 (だけ) の主語」ではない。

- (13) 明日雨が降ったら, (私は) 出かけない。

- (14) 田中さんは 部屋に入って, 明かりをつけた。

## 2.4 無標と有標

「は」と「が」の使い分けでもう1つ重要なのは, 無標と有標の関係である<sup>(9)</sup>。つまり, 従属節では, 「が」が無標, 「は」が有標であるのに対し, 主節または単文では, 「は」が無標, 「が」が有標となる。

## 2.5 使い分けのフローチャート

以上を受けて, 「は」と「が」の使い分けをフローチャートを作ると次のようになる。

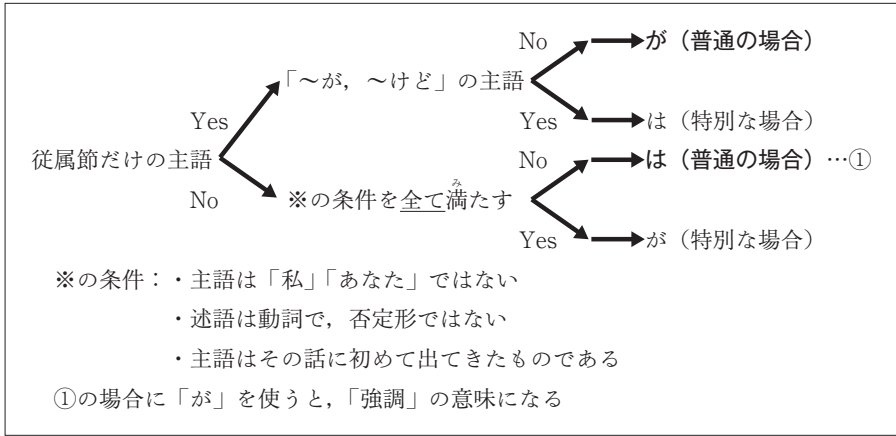


図1 「は」と「が」の使い分け

### 3. 「は」と「が」の使い分けを学習者に伝えるために

2では、前稿までの議論と図1のフローチャートについて簡単に説明した。上述のように、このフローチャートのカバー率は高いが、このまま学習者に提示するとやや難易度が高い。本節では、図1のフローチャートを学習者に伝えるための筆者の工夫について述べる。

#### 3.1 「主語」を中心とするアプローチ

筆者は、「は」と「が」については「主語」という概念を中心に説明するのがよいと考えている。それは、「主語」が学習者にとってなじみ深い概念であると思われるからである<sup>(10)</sup>。

##### 3.1.1 単文における主語

まず、単文における主語だが、次のような文で考えれば、どれが主語であるかは容易にわかる<sup>(11)</sup>。ここで、「主語」は「は」または「が」で表されることと、述語が動詞以外（イ形容詞、ナ形容詞、名詞）のときは、通常、主語は「は」で表されることを確認しておく。

- (15) 太郎は本を読んでいる。 (動作の主)
- (16) 太郎が本を読んでいる。 (動作の主)
- (17) 教室の前に男の人がいる。 (存在の主)

- (18) さっき、あのドアが開いた。(出来事の主)  
 (19) この部屋は静かだ。(状態の主)  
 (20) あの山は高い。(状態の主)  
 (21) 彼の息子は大学生だ。(属性の主)

### 3. 1. 2 従属節における主語 (1) — 従属節が単独の主語を持つ場合 —

次に、従属節が独自の主語を持つ場合だが、これは、3. 1. 1で「主語」がわかっているならば、容易に理解できるものである。すなわち、いずれの場合も、[ ]内が従属節であり、その中の「主語」(「主」)が何であるかは3. 1. 1との類推で理解できるということである。

- (22) [太郎が本を読んでいた] とき, (玄関のベルが鳴った。)  
 (23) [冷蔵庫にケーキがあった] から, (私はそれを食べた。)  
 (24) [山田さんは来た] が, (田中さんは来なかった。)  
 (25) [田中さんが書いた] 本 (はこれです。)  
 (26) [彼が来れ] ば, (パーティーは面白くなるだろう。)  
 (27) [お金が貯まっ] たら, ((私は)旅行に行くつもりだ。)

ここで、(22)~(24) (連用節) と (25) (連体節) では□で囲んだ部分が「助詞」か「名詞」かで異なるものの、節の中の述語の形は文と同様になるのに対し、(26)(27) (連用節) では述語の形が文の場合とは異なる。しかし、(22)~(27)の全ての場合において、(動作、出来事などの)「主」がだれ(何)であるかは問題なくわかると思われる。また、この場合、通常、主語は「が」で表されることも確認しておく。

### 3. 1. 3 従属節における主語 (2) — 従属節と主節の主語が同じ場合 —

最後は、従属節と主節の主語が同じ場合である。

- (28) 太郎は本を読むとき、よくお菓子を食べる。  
 (29) 彼の息子は大学生なのに、あまり本を読まない。

例えば、(28)の「太郎は」が従属節の述語である「読む」に対応する主語であることは3. 1. 2の議論からわかるはずだが、ここでは、波線部の「主」は誰なのかを学習者に尋ねる。すると、(29)では「太郎は」が主語であることは容易にわかる。

このように、学習者自身から波線部の主語が「太郎は」であることを引き出せれ

ば、(28)(29)における「太郎は」「彼の息子は」はともに、従属節だけでなく、主節の主語でもあることは容易に理解してもらえるはずである。こうした場合、主節と従属節に共通の主語は主節の主語と見なし、単文の場合と同様に考えることを説明する。その上で、こうした従属節と主節の主語が同じ場合は、通常、主語は「は」で表されることも確認しておく。

### 3.2 フローチャートの説明

以上のことから、次のことが確認できる。

- (30) a. 単文の場合、述語が動詞のときは主語は「は」と「が」の両方の場合があるが、述語が動詞以外のときは主語は通常「は」である
- b. 複文の場合、従属節だけの主語がある場合と、主節と従属節が同じ主語を持つ場合があり、後者の場合は単文の場合と同様の扱いになる
- c. 従属節だけの主語がある場合、その主語は通常「が」であるが、主節と従属節が同じ主語を持つ場合、その主語は通常「は」である

これらを踏まえてフローチャートを作ると、前述の図1のようになる。

ここで、(30b)は図1の「従属節だけの主語（以下、「従属節）」の「普通（無標）の場合」が「が」であることに、(30a)(30c)は「単文・主節の主語（以下、「文）」の「普通（無標）の場合」が「は」であることにそれぞれ対応している。

ここまでは、学習者自身に確認してもらえる点だが、図1の残り（波線部）は教師側が加えることになる。

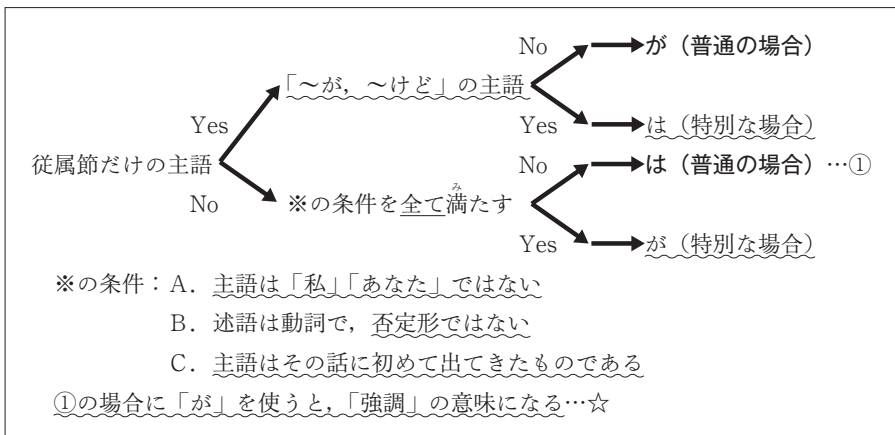


図1 「は」と「が」の使い分け（再掲）

まず、基本的には「が」が使われる従属節で「は」が使われる特別（有標）な場合だが、これは(31)のような「～が、～けど（ガ節，ケド節）」の場合である<sup>(12)</sup>。

(31) 兄はアメリカに留学したが、私は中国に留学した。

次に、文の場合だが、まず強調すべきなのは、普通の場合は「は」であるということである。☆で表している部分にあるように、この場合に「が」を使うと義務的に「総記」と解釈されてしまい、意図せずに聞き手に不快感を与える危険性があるので、十分注意が必要である<sup>(13)</sup>。

その上で、文で「が」が使われる特別の場合（※）の条件を挙げる。

まず、A だが、主語が1, 2人称の場合は「が」を使うと義務的に総記と解釈される。

(32) a. 私はその会議に出席します。

b. 私がその会議に出席します。

例えば、(32a)は図1の無標の場合で話し手以外に会議の参加者がいてもかまわないが、(32b)は①の場合に「が」を使っているため、「私」が義務的に総記の解釈を受け、「他の人ではなく私がその会議に出席する（＝他の人はその会議に出席しない）」という意味を表す。この意味は学習者が意図していないもの場合が多いので注意が必要なのである。

次に、Bの前半は3.1.1で確認したとおりである。つまり、（総記ではない中立叙述<sup>(14)</sup>の形で）「が」が使えるためには述語は動詞でなければならない（もちろん、述語が動詞であっても「は」が使われる方が圧倒的に多いので、述語が動詞であることは中立叙述で「が」が使えることの必要条件ではあるが、十分条件ではない）。また、多くの文献で指摘されているように、否定文では「は」が使われるので、Bの条件にそのことを加えた<sup>(15)</sup>。

最後に、C だが、これは次のような例からわかる。つまり、テキスト内で初出の場合は「が」になる（のが普通）だが、2回目以降は「は」になる（のが普通）ということである<sup>(16)</sup>。

(33) 昔々あるところにおばあさんが (×は) いました。ある日 おばあさんは  
(×が) 川に洗濯に行きました。

このように、主節・単文では基本的に「は」が使われるのだが、その場合に「が」を使うと、上述のように、その「が」は義務的に総記と解釈される。

以上述べた点を大きくまとめると、次のようになる。

(34) a. 従属節では基本的に「が」が使われる

- b. 従属節以外（主節・単文）では基本的に「は」が使われる
- c. bの場合に「が」を使うと、その「が」は義務的に総記と解釈される

### 3.3 説明のポイント

このようにして、学習者の知識を活用しながら、図1のフローチャートを導くことができる。その上で、学習者に注意すべきことは、まず、(34)をしっかりと理解することである。言い換えると、「は」と「が」の使い分けの本質は(35)に尽きるということである。

- (35) 従属節では「が」、それ以外（「文」）では「は」を使い、特に主語を強調したいときに限り、文で「が」を使う<sup>(17)</sup>

ここで、(34)(35)（やや詳しくした図1）のいずれにも、初級修了レベルの学習者にとって未知の概念は存在しない。したがって、(36a, b)は実態に即したものととは言えず、実際は(37)の通りであることを学習者に伝えることが重要である。

- (36) a. 「は」と「が」の使い分けは難しい  
b. 「は」と「が」は韓国語話者以外には習得が困難である（＝(1)）
- (37) 「は」と「が」の使い分けは、何語の話者にとっても、とても簡単である（庵2018b）

### 3.4 実際のテキストから

本小節では、実際のテキストにおいて、図1のフローチャートがどの程度当てはまるかについて見てみる。用いるテキストは、「アメリカ、有人宇宙飛行に成功 9年ぶり」（毎日小学生新聞2020年6月2日）である（小見出しは削除<sup>(18)</sup>）。

- (38) 宇宙飛行士2人を乗せたアメリカの新型宇宙船「クルードラゴン」（aが）5月30日、アメリカ・フロリダ州のケネディ宇宙センターからファルコン9ロケットで打ち上げられました。クルードラゴン（bは）国際宇宙ステーション（ISS）とドッキングし、宇宙飛行士2人（cが）ISSに入りました。

アメリカの宇宙船による有人飛行（dは）、スペースシャトル（eが）引退した2011年以来9年ぶりです。この間、ISSへアメリカや日本を含む各国の宇宙飛行士を運ぶ手段（fは）、ロシアのソユーズ宇宙船だけでした。①クルードラゴンは、民間企業のスペースX（gが）主体



となって開発しました。スペース X (h は) 宇宙船とロケット製造だけでなく、運用管制も担い、世界で初めて民間 (i が) 中心になって本格的な有人宇宙飛行を実現しました。

スペースシャトル (j は) 1981 年に初飛行しましたが、全長 37 メートルと大型で、1 回の飛行で 500 億円以上ものお金 (k が) にかかるようになってしまい、引退しました。宇宙船の開発などにかかる国のお金を抑えるため、アメリカ (l は) 民間企業に開発などを担ってもらう計画を進めてきました。スペース X (m は) 無人補給機「ドラゴン」を開発して ISS に荷物を届け、クルードラゴンの開発につなげました。

②今回の打ち上げ (n が) 「最終試験」の位置づけで、ともにアメリカ航空宇宙局 (NASA) の宇宙飛行士、ロバート・ベンケンさん、ダグラス・ハーリーさん (o が) 乗り込みました。ISS には 1~2 か月ほど滞在し、海上にパラシュートで帰ってきます。

8 月末にも打ち上げられる次の段階の 1 号機には、日本の「宇宙航空研究開発機構」(JAXA) のベテラン宇宙飛行士、野口聡一さん (55) (p が)、アメリカの宇宙飛行士 3 人とともに乗り込み、ISS へ半年間の長期滞在に向かう予定です。

クルードラゴン (q は) タッチパネルで操作する新しい仕組みになっていて、3 回目の宇宙飛行となる野口さん (r は) 「黒電話からスマートフォンに進化したみたい」と例えています。クルードラゴンの打ち上げ成功を受け、野口さん (s は) 「今回の成果を私たちのフライト (飛行) にうまく生かせるように、さまざまな成果を出していけるように、これからがんばっていきたいと思います」と語りました。

(38) には 19 個の主語がある。図 1 の a~s に記した「は」「が」は図 1 から予測されるものだが、これらは 1 例 (下線②) を除き全て実例での「は」と「が」の分布と一致していた<sup>(19)</sup>。このように、図 1 はシンプルなものであるが、そのカバー率は高く、費用対効果は高い<sup>(20)</sup>。

#### 4. ハーガ構文

2 節と 3 節では「は」と「が」の使い分けについて考えた。「は」と「が」については、使い分けが注目されるのは仕方がないが、それ以外にも目を向けるべきも

のがある。本節ではそのうち、「ハーガ構文」について考える。

日本語では(39)~(43)のように、1文の中に「は」と「が」が同時に現れる「ハーガ構文」と呼ばれる構文がよく使われる<sup>(21)</sup>。

- (39) 象は鼻が長い。  
 (40) 太郎は背が高い。  
 (41) 花子は髪が長い。  
 (42) あのスーパーは野菜が安い。  
 (43) 田中さんはお父さんが医者だ。

ハーガ構文は形容詞文に特に現れやすく、日本語の形容詞文の特徴の1つとも言える。ここで、ハーガ構文には次の3つのタイプがあると考えられる。

第一のタイプは、(39)~(41)のように、「YがZ」が1つの述語をなすもので、この場合、「X」と「YがZ」が叙述関係(predication)をなすため、「Yが」は省略できない。例えば、(39)は「象」という主題について、「鼻が長い」という解説を行っている。この場合、「鼻が長い」が1つの述語に当たるので、「鼻が」を省略すると、「長い」だけでは「象」と叙述関係を結べないため、非文となる。(40)(41)も同様である。

- (39') 象は 鼻が長い。

主題 解説

- (39'') ×象は長い。

なお、このタイプについては、三上(1960)以来、「XのYがZ」と関連づける分析が多いが、(39'')~(41'')に見られるように、「XのYはZ」の許容度は(それほど)高くなく、「XはYがZ」の方が自然なので、こうした対応付けは行わない方がよい<sup>(22)</sup>。

- (39''') 象の鼻は長い。  
 (40''') ?? 太郎の背は高い。  
 (41''') (?) 花子の髪は長い。

第二のタイプは、(42)(43)のように、「Yが」が統語的には省略できるものである。

- (42') あのスーパーは安い。

- (43') 田中さんは医者だ。

実際、(42')(43')は文法的であるが、「Yが」の有無で意味が変わる(可能性がある)。例えば、(42)は「あのスーパー」の野菜以外が安いかどうかには言及して

いないのに対し、(42')は「あのスーパー」の品物が全体的に安いということを言っている。したがって、「あのスーパー」に話し手が高いと思うものがあったとしても、(42)は不誠実な発話にはならないが、(42')はそうではない。同様に、(43)が正しくても(43')が正しいとは限らない。

なお、このタイプについては、「XのYはZ」との意味の差はそれほど大きくなり、「XのYはZ」を使うことも可能だが、2つのタイプでは主題(かつ主語)が異なるため、例えば、「健康に気をつけている」のが(44)では「田中さん」であるのに対し、(45)では「田中さんのお父さん」になる、といった違いが生じる。

(44) 田中さんはお父さんが医者だ。だから、いつも健康に気をつけている。

(45) 田中さんのお父さんは医者だ。だから、いつも健康に気をつけている。

いずれにしても、第一のタイプと同様、このタイプも他言語にはあまり見られないものなので、学習者が適切に理解、産出できるように例文や練習を工夫することが必要である。

最後に考える必要があるのは、「XのYはZ」は言えるが、「XはYがZ」は言いにくいタイプである。

(46) a. ○立川の昭和記念公園は 広い。

b. ??立川は 昭和記念公園が広い。

(47) a. ○渋谷の119は にぎやかだ。

b. ?渋谷は 119がにぎやかだ。

(46)(47)ではいずれもaは自然だが、bは不自然である。それは、下線部の主題に対する解説として、aの波線部は適切であるが、bの波線部は不適切であるためである<sup>(23)</sup>。

## 5. 「は」をめぐる問題——本当は簡単なことと本当は難しいこと——

本稿では、「は」と「が」の使い分けを中心に考えてきた。(35)(37)で指摘したように、実は、「は」と「が」の使い分けは決して難しいものではない。「は」と「が」という形式上の違いに目が見てしまい、両者の実際の違いに目が向かなかったこと、日本語学の研究成果が全く生かされてこなかったことなどが、「は」と「が」の使い分けが難しいと考えられてきた理由であると考えられる。

では、「は」と「が」に関して難しい問題はないのかというと、そうではない。むしろ、本当は重要で、かつ、難しいのは「は」という助詞の振る舞いである。本

節では、「は」と「が」の使い分け以外の、使い方が難しく、かつ、重要なものをいくつか取り上げる。

「は」と「が」の使い分けが理解できたら、次に扱うのは「主題」としての「は」である。「主題」については2節でも簡単に触れたが、中級後半以降では、2節、3節で扱わなかった「主語ではない「は」」についても「産出レベル」のものとして扱う必要がある<sup>(24)</sup>。

(48) 真正面からクロフトはスコットを見据えた。「一切の責任は私がとる」  
(中島渉『サザンクロス流れて』BCCWJ。LBb9\_00155)

(49) へびのぬいぐるみは千重子が作った。  
(吉田潮『我が愛しの芸人たち』BCCWJ。LBr7\_00017)

また、中級後半以降では、次のような述語に割って入る「は」の使い方も重要である。

(50) a. あの本を読んだ。  
b. あの本を読みはした。

(51) a. あの本を読んだ。{A. ○よくわかった／B. ○よくわからなかった}。  
b. あの本を読みはした。{A. ?よくわかった／B. ○よくわからなかった}。

(50a) は価値判断について中立的なので、(51a)のA、Bいずれのつながりも可能だが、(50b)は否定的な価値判断を含むので、(51b)のBは自然だがAは不自然となる。

一方、否定文の場合、(52a)のような「は」を含まない場合は全面否定を表すのに対し、(52b)のような「は」を含むものは、「おいしい」(「味」)以外の尺度との関連を述べるために使われる。例えば、(52b)は(53)のような文脈で使われ、「味」という尺度からはあまり評価できないが、「雰囲気／値段」といった尺度からは評価できるという意味を表す<sup>(25)</sup>。

(52) a. あのレストランはおいしくない。(=まずい)  
b. あのレストランはおいしくはない。

(53) あのレストランはおいしくはない。しかし、{雰囲気はいい／値段は安い}。

最後は三上章の仕事との関連である。三上(1960)は、「は」と「が」の違いを明らかにすることを生涯の研究目的とした三上が、主語廃止論をわかりやすく、かつ、豊富な実例を元に解き明かした名著である。その中で三上が挙げている「ハの

兼務」という現象は、今では日本語学の基本的な統語操作と見なされている。

- (54) a. 太郎はここにあったケーキを食べた。  
 b. 太郎がここにあったケーキを食べた (こと)
- (55) a. ここにあったケーキは太郎が食べた。  
 b. ここにあったケーキを太郎が食べた (こと)

(54)(55) からわかるように、「は」は取り立て助詞(係助詞)として「が」「を」の機能を兼ねており、そのことはそれぞれの a 文に対応する b を作ることで明らかになる。この「無題化(コト化)」は日本語学の文献で(南(1974, 1993)の A 類~C 類のように)無定義で使われることが多く、それだけ日本語学における基本概念となっていると言える。

これに対し、三上が同書で指摘している「ハの本務」についての関心はあまり高くない。三上(1960:115)は「は」と「が」の違いを次のように指摘している。

- (56) a. 係助詞 心理的(虚) 大きく係る  
 b. 格助詞 論理的(実) 小さく係る

つまり、係助詞である「は」は文末を目指して係っていくのに対し、格助詞である「が」は述語(の語幹)までにしか係らないということである。

この違いは、例えば、次のような違いを考える上でも重要である。

- (57) a. ○旅行をするために貯金をした。  
 b. ○旅行をするために貯金をしたが、新型コロナでどこへも行けなくなった。  
 c. ○旅行をするために貯金をしたら、いつの間にか貯金が100万円できた。
- (58) a. ??旅行をするためには貯金をした。  
 b. ×旅行をするためには貯金をしたが、新型コロナでどこへも行けなくなった。  
 c. ×旅行をするためには貯金をしたら、いつの間にか貯金が100万円できた。  
 d. ○旅行をするためには貯金をしなければならない。

(57)(58) からわかるように、タメニ節は文末に係ることも、従属節内に収まることも可能だが、タメニハ節は従属節には収まりにくく、単なる述べ立ての文末にも係りにくい。こうした違いは、「は」がつくことで、タメニハ節が文末まで係るという特質を獲得したためと解釈できるように思われる(タメニ節とタメニハ節に

については塩入 1995 参照)。

このように、「ハの本務」をはじめ、「は」にはまだまだ考えるべき点が多く残っているように思われる<sup>(26)</sup>が、はっきりしているのは、本当に難しいのは「は」と「が」の使い分けではなく、「は」であるということである。

## 6. おわりに

本稿の前半では、前稿までで提示した「は」と「が」の使い分けのフローチャートを学習者への教育という観点から見直し、前稿までで指摘したように、「は」と「が」の使い分けはどの母語話者にとっても難しくないのであることを学習者に納得させることは容易であることを示した。

後半では、「は」と「が」の使い分けは難しくない一方で、「は」の使い方は文脈との関連が強いため難しいことをいくつかの文法項目を例に示した。

学習者が自らの意思を適切に産出し、テキストに表されている含意を正確に読み解けるように、学習者の支援を行うことが文法教育の仕事であるとすれば、その観点から「は」についての考察が必要であると言えるのである。

## 注

1. 3. 4で見ると、前稿までで提示したフローチャートによって、実際のテキストにおける「は」と「が」の使い分けはほとんど問題なくカバーできるというのがそうした確信の最大の根拠である。
2. 「前稿まで」とは庵 (2018a, 2018b) および Iori (2017) を指すものとする。
3. 「主語」をめぐっては三上章の一連の議論 (三上 1953, 1960, 1963 ほか) が重要だが、これについては、庵 (2003, 2012, 2020) で論じているので、本稿ではこれ以上言及しない。
4. 三上の主語廃止論ではこうした「主」的性質を持つものは「主格 (nominative)」だが「主語 (subject)」ではないとされるが、本稿では、三上の主語廃止論に基本的に賛同しつつも、「主」的性質を持つものを「主語」と呼ぶ (これについて詳しくは庵 2003 参照)。
5. 「が」には主語を表さないものもある。これについては庵 (2018b) の第 1 部 §9 を参照されたい。
6. 節にとって述語は必須だが、主語は必須ではない。例えば、(11) のように主語が明示的に現れない場合もあるし、(ア) のように主語を節内に明示できない場合もある。  
(ア) [カメラを買った] 田中さんは早速何枚も写真を撮った。
7. 英語では従属節と主節の順序は統語的には固定されていないが、日本語では、少なくとも書きことばでは両者の順序は「従属節—主節」の順で固定されている。

- (イ) a. When he entered the room, John was singing a song.  
b. John was singing a song when he entered the room.
- (ウ) a. 部屋に入ってきたとき、ジョンは歌を歌っていた。  
b. #ジョンは歌を歌っていた。部屋に入ってきたとき。  
したがって、(イ) a, bは統語的にはともに可能であるのに対し、(ウ) bは義務的に倒置と解釈される。
8. ここでは複文と重文 (compound sentence) は区別せず、ともに複文とする。なお、日本語の単文と複文の区別は英語とは異なる。詳しくは、庵 (2012) を参照されたい。
9. 無標と有標について詳しくは、庵 (2012, 2017) を参照されたい。
10. 非英語母語話者でも、英語の学習経験があれば、「主語」にはなじみがあると思われる。
11. この段階では、「主語」という学習者にとってなじみのある概念に学習者の意識を集中させるために、(エ) のような主題と主語が一致しない文は扱わない。  
(エ) この写真は私が撮ったんだ。
12. これは、南 (1974, 1993) のC類に当たるもので、それ以外にも「～し(シ節)」, 並列のテ節, 中止節, 判断の根拠を表すノデ節, カラ節などがあるが (田窪 1987, Iori 2017a), 「は」でないと不自然なのはガ節, ケド節であると思われるので、ここでは、その他の節は挙げないこととする。
13. 「総記 (exhaustive listing)」は久野 (1973) の用語で、(オ) のような構造において、「A だけが B (という属性を持つ)」という意味を表す。この場合、(オ) は意味関係を変えずに (カ) に言い換えられる。  
(オ) A が B (だ)。 Ex. 田中さんがコンパの幹事だ。  
新情報 旧情報                  新情報    旧情報  
(カ) B (の) は A (だ)。 = コンパの幹事は田中さんだ。  
旧情報    新情報                  旧情報                  新情報
14. 「中立叙述 (neutral description)」も久野 (1973) の用語で、(キ) のような構造で、文全体が新情報になる場合である。この場合、「B (の) は A (だ)」には置き換えられない。  
(キ) A が B (だ)。 Ex. あっ、雨が 降っている。  
新情報 新情報                          新情報    新情報  
A～Cは「が」が中立叙述で使える条件と見なすことができる。「が」が中立叙述になるのは、仁田 (1991) の現象描写文、益岡 (1987) の事象叙述文の特徴でもある (Iori 2017b)。
15. 否定文の部分は本稿で初めて付け加えたものである。
16. この一般化の例外については、庵 (1997, 2019a) を参照されたい。
17. 総記の場合についての議論は本稿では省略する。詳しくは庵 (2018b) を参照されたい。
18. <https://mainichi.jp/articles/20200602/kei/00s/00s/014000c> (最終閲覧日 2020年8月30日)
19. 下線部①の「クルードラゴンは」は (4) の「この本は」と同じく主語ではないので外した。一方、下線部②の「今回の打ち上げは」は、図1からは「が」が予測されるが実例は「は」である。これは、「今回の打ち上げは」が「今回のクルードラゴンの打ち上げは」であり、「クルードラゴン」が既出であるためである。「打ち上げ」は、「～の」を必要と

- する名詞だが、こうした庵 (2019a) などと言う「1項名詞」を含む名詞句は1項名詞自体は初出であっても、全体は既出と見なされ「は」がつく (cf. 野田 1995:282)。したがって、下線部②に関しては、図1の規則をやや詳しくすればカバーできると言える。
20. 図1には一定の反例がある。これは、図1が庵 (2017) などと言う「100% を目指さない文法」の考え方に即しているためである。例えば、図1からは(ク)では「は」が予測されるが、実際は「が」が使われる (注16 参照)。  
(ク) 彼は病気知らずが自慢だった。その彼が (??は) 急病であっけなく亡くなった。
21. 野田 (1996) ではこれ以外にも (ケ)(コ) など様々なタイプのハーガ構文が扱われているが、本稿ではこれらについては考えない。  
(ケ) かき料理は広島が本場だ。(「かき料理構文」)  
(コ) 辞書は新しいのがいい。(「辞書は新しいのがいい」構文)
22. 中国語などでは「XのYはZ」に対応する文の方が自然であるといったこともあるので、その点からもこうした対応付けを行わない方がよいと言える。
23. 「XのYはZ」と「XはYがZ」と結びつけることの問題点については、菊地 (2010) に重要な指摘がある。「XはYがZ」は日本語の重要な表現形式 (文型) であり、学習者に産出できるようになってほしいものであるが、そうであるだけに、この文型でどのようなことが表現できるのかについての教師側の理解が重要であると言える。
24. 文法項目における理解レベルと産出レベルの区別の必要性について詳しくは、庵 (2015a, 2015b, 2017), 太田・永谷・中石 (2018) などを参照されたい。
25. 動詞とイ形容詞の場合は「は」の有無で (52a) (52b) の2つの意味が明確に区別されるが、ナ形容詞と「名詞+だ」のときは表層的にはこの区別がなくなる (庵 2018b)。
26. 庵 (2019b) では「ハの本務」にコーパスを用いた定量的アプローチで迫ろうとしたが、まだ考察は不十分であり、さらに同様のアプローチを深める必要がある。

## 参考文献

- 庵功雄 (1997) 「「は」と「が」の選択に関わる一要因」『国語学』188
- 庵功雄 (2003) 『『象は鼻が長い』入門』くろしお出版
- 庵功雄 (2012) 『新しい日本語学入門 (第2版)』スリーエーネットワーク
- 庵功雄 (2015a) 「日本語学的知見から見た初級シラバス」庵功雄・山内博之編『現場に役立つ日本語教育研究1 データに基づく文法シラバス』くろしお出版
- 庵功雄 (2015b) 「日本語学的知見から見た中上級シラバス」庵功雄・山内博之編『現場に役立つ日本語教育研究1 データに基づく文法シラバス』くろしお出版
- 庵功雄 (2017) 『一歩進んだ日本語文法の教え方1』くろしお出版
- 庵功雄 (2018a) 「「は」と「が」の新しい捉え方についての一考察」『一橋日本語教育研究』6, コ出版
- 庵功雄 (2018b) 『一歩進んだ日本語文法の教え方2』くろしお出版
- 庵功雄 (2019a) 『日本語指示表現の文脈指示用法の研究』ひつじ書房
- 庵功雄 (2019b) 「コーパスを用いて「は」と「が」に関する三上説を検証する試み」『言語



- 資源活用ワークショップ2019 発表論文集』国立国語研究所
- 庵功雄 (2020) 「三上章」『日本語学 特集日本語学を創った人々』39-1, 明治書院
- 太田陽子・永谷直子・中石ゆうこ (2018) 「8種のコーパスに見る技能別特徴項目」『一橋大学国際教育センター紀要』9, 一橋大学
- 菊地康人 (2010) 「日本語を教えることで見えてくる日本語の文法」『日本語文法』10-2
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 塩入すみ (1995) 「タメニとタメニハ」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (下)』くろしお出版
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5, 明治書院
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 野田尚史 (1995) 「ハとガ」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (上)』くろしお出版
- 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書1「は」と「が」』くろしお出版
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』くろしお出版
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』くろしお出版より復刊 (1972)
- 三上章 (1960) 『象は鼻が長い』くろしお出版
- 三上章 (1963) 『日本語の論理』くろしお出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- Iori, Isao (2017a) "The layered structure of the sentence", in Shibatani, Masayoshi, Miyagawa, Shigeru and Noda, Hisashi (eds.) *Handbook of Japanese Syntax*. De Gruyter Mouton.
- Iori, Isao (2017b) "A brief survey of functional differences between the "topic" marker *wa* and the "subject" marker *ga* in modern Japanese", *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*. 58-1, 一橋大学